

有島武郎全集
第八卷



大正十三年九月廿五日印刷
大正十三年十月五日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 足助素一

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地
島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
三秀舍

有島武郎全集

第八卷

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

電話牛込 二五七三番
振替口座東京 四二八八九番

有島武郎全集 第八卷

目次

ドラ(テニスン)	．．．．．	一
西方古傳(シエンキウウイッチ)	．．．．．	七
小さな夢(ガルスウオーシー)	．．．．．	一七
眞夏の夢(ストリンデルヒ)	．．．．．	五三
燕と王子	．．．．．	七一
ホキットマン詩集	．．．．．	八五
譯者小序	．．．．．	八六
目次	．．．．．	九〇
譯詩		

目次

一八五五年代

顔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一九

一八五六年代

大道の歌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一三二

ブルックリン渡船場を横ざりて・・・・・・・・一七五

一八六〇年代

ワルト・ホヰットマンの警告・・・・・・・・二〇〇

結局私は何んだ・・・・・・・・・・・・・・・・二〇一

私の手を握る君が誰れであらうと・・・・・・・・二〇二

日の入りに私が聞く時に・・・・・・・・・・二〇七

私は攻撃されてゐるのを聞く・・・・・・・・二一〇

私は坐して眺めやる・・・・・・・・・・・・・二一一

おゝ常に生きつゝ——常に死につゝ・・・・・・・・二二三

假象に對する怖ろしき疑ひについて・・・・・・・・二二四

私はルイジアナで一本の榊の木の育つのを見た・・二二七

炬火	二一九
この瞬間、あこがれの物思はしき	二二〇
既にありしものと共に	二二二
創造の法則	二二九
揺り動きやまぬ搖籃から	二三一
十字架にかけられた彼れに	二五七
汝法廷の審判に立てる極重惡人よ	二五九
名もない姪賣婦に	二六二
見も知らぬ人に	二六四
あなたに	二六六
さゝげもの	二六七

一八六五——六年代

私が觀察をはじめの時	二六八
敵ではない私に攻め入るのは	二六九
大統領リンカーン追頌歌	二七〇

目次

聖なる死の囁き 三〇四

群衆——その海原のさかまく波間から 三〇六

畑から來なよお父 三〇八

和睦 三一五

一八六七年代

涙 三一六

船の上、その舳首に 三一八

別れに臨みて讀者に 三二〇

一八七〇年代

鼓聲 三二一

神 三二二

喜べ、船子よ、喜べよ 三二五

最後の祈禱 三二六

一八七六年代

冬の蒸氣機關車に 三二八

牛ならし 三二一

一八六七年代

私が書物を読む時 三三四

年代不明

私が自分の頭を君の膝におく時、仲間よ 三三五

自分の魂に 三三七

一八五五年代

自己を歌ふ 三四〇

一八五五——六年代

厳かにもやさしいオルガンのパイプよ私はお前の聲を聞いた 五三九

一八五六年代

この合肥 五四一

おもひ 五四八

目次

目次

一八六〇年代

美女・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・五四九

今、生の盛りに・・・・・・・・・・・・・・五五〇

屢々ひそやかに私に近づくあなたよ・・・・・・・・五五二

時たま私の愛するものに對して・・・・・・・・五五三

私に似た大地・・・・・・・・・・・・・・五五四

博名を知り得た時・・・・・・・・・・・・五五五

私達二人の若者は互ひに相寄りながら・・・・・・・・五五七

私は愛慾に悶えるその人だ・・・・・・・・五五九

女の歌手に・・・・・・・・・・・・・・五六〇

一人の弟子に・・・・・・・・・・・・・・五六一

臨終の人に・・・・・・・・・・・・・・五六三

一八六五年代

母と嬰兒・・・・・・・・・・・・・・五六六

一八六七年代

走者	五六七
忍耐強いしづかな蜘蛛	五六八
牢獄の歌ひ手	五七〇
追　　加	

「言葉の歌」から	五八〇
愛の表現	五八二

口　　畫

風景と花（一九二三年作）	（巻頭）
--------------	------

ドラ

— テニス —

静けかる田園の伏屋、老農アランと共にウヰリヤムとドラと住みき。ウヰリヤムは其子にてドラは其姪なりしを、アラン見る毎に「彼等めあはすにふさへり」と思はぬ事なかりき。ドラよく老伯父が心を知りて、若人に仰慕の思ひ切なりしも、ウヰリヤムは青春のまどひや、目ふりせりとはあらねども、見なれつればドラを物としも覺えずて過ぎぬ。

一日、アラン其子呼び近けて云ひぬ。「我が兒よ我れ晚くめあひたれども、能はば死なん前に、膝の上孫を見んと望む。我が心なりぬ。ドラを見すや。彼女見るに美しくて、年に似ず心まめなり、彼女は己が弟の愛娘、我と弟とは鬨ぐ事ありて永く相見ざりしが、彼れ遂に異郷の空に亡き人となりつ。されど我れ彼の爲めに彼女をいつくしみ育みぬ。妻とせよ。我は夜となく晝となく日頃此慶事あらんことを庶幾へりき」されどウヰリヤムが答はふしつけの「兒はドラとめあはじ、命の限りめあふことあらじ」とあるを聞きたる老父は得堪えず拳を固めて激怒の聲を上げつ「めあはじとや、心ふとし、思へば我が若かりし日には、父言即ち法なりき、我には今も爾

かぞ、心して思へウキリヤム、一月が程に深く慮りて我が望に副へよ、若しさらすは神かけて許さじ、さなり、復た我が門に影をだに見すな」と言ひ出づるを、唇を反して罵りいらへつ。ウキリヤム今は見るにつけて、彼女ややに好ましからず、もてあつかひ愈々心なかりしを、ドラ美しう忍び堪へぬ。

かくてウキリヤムは父の家を捨てて月一つを閑せざるに、去る畑に働く可き身となり、半ば戀に、半ばつらあてに、労働者の子マリー・モリソンと相婚しぬ。夕べ、賀式の鐘響きぬる時、アラン其姪を呼び云ひけるは、「我が愛づる者よ。我れ痛く汝をいつくしむといへど、若し嘗て我が子なりし者と相語り、彼が妻と呼べる者と語を交へば、此家復た汝の入るにまかせじ。我が所思即ち法ぞ」ドラすなほにうけがひつ。「爾かあり得ず、伯父君の心解く時あるべし」と心には念じ思ひぬ。

かくて日往き、ウキリヤム男子生れし幸ありしも、家事やゝに傾きたれば、さすがに心くだけで、日に父の門邊を過りしが、父遂に顧みざりき。されどドラはつゝまやかに貯へたる僅かのものを心こめて竊やかに彼等に齎しゝを、熱疾ウキリヤムを襲ひ、麥黄ばむ收穫頃にあへなくなりしまで、彼等さへ何者の業とも悟りあへざりき。

ウキリヤム身まかりて後、ドラ、マリーを訪ひぬ。マリー坐して忘形見を眺めつゝ、涙にくれて、ドラにそゞろなき恨めしの思なり、ドラ來りて云ひぬ「妾今日に至るまで、伯父君の意に従ひぬ。始めウキリヤムに累あらしめしは、凡て妾よりなれば、罪逃れ難かり。されどマリー、逝きにし人の爲めに、逝きにし人の擇びたりし君

の爲めに、將た其孤兒みなしごの爲めに、妾今君に來りぬ。此五年が程、此秋の如くみのりよき年はあらず。妾に其孩兒こゝろこを給へ。麥の間に置き、伯父君の見そなはすを待たん。彼れ豐作に心ゆたかなれば、逝きにし人の爲めに其兒を祝したまふべし」ドラ孩兒を抱きて麥畑に入りつ。罌粟の花まじり、まだ刈られざる畦にそを置きしが、老農至りしも、傭はれ人彼に、ドラ孩兒もて待ちつゝありと告ぐる者もなければ、彼れ、彼女に何の質す所なかりき。ドラ起きて彼に行きて告げなんと庶幾ひたれども、それも心折れて止みぬ。かくて麥は刈られつ、日は落ちつ。眼路の限りはあやなくも淋しく暗み渡りぬ。

されど次の朝來りし時、ドラ起ちて再び孩兒を抱き畦に坐し、伯父の眼に入らん時見るに樂しからしめんとて、ほとりに咲ける花の限りを小さき環に編みて、孩兒の頭によそひつゝ待ちぬ。老農果して至り、畑を過る時彼女を質し、傭はれ人を差おきて來り云ひぬ。「汝昨日何處にありしや。其孩兒何人のぞや。此に何しつゝあるや」ドラ眼を垂れやさしく答へけるは、「こはウキヤムが忘形見なり」「云はざる事か」とアラン罵り出でぬ。「汝に禁め置きたる事忘れ果てしか」「其罪妾かしこみてあたらん、されど逝きにし人の爲め、此孩兒を取りて祝させ給へ」「かゝる仕業汝と彼の婦とのたくめる所なるを知る。我には我の爲すべき事あり、我が言即ち法なるを汝犯すとならば、好し、其孩兒は取らんなれど、汝行きて再び我を見んとはする勿れ」かく言ひつゝ彼は痛く打叫びて、もだゆる孩兒を抱き上げつ。花環は落ちてドラが足もとにあり。彼女手を組みて差うつむきぬ。孩兒の叫びはやゝに遠かりつゝ、尙畑のあなたより聞ゆるなり。彼女遂に地に伏し、懷舊の思彼やはや、胸にみちて裂く

る計りなるに、地に首をつけ、聲を飲みつゝ泣きぬ。かくて麥は刈られつ、日は落ちつ。眼路の限りはあやなくも淋しく暗み渡りぬ。

纏てドラ、マリーの家に至り、其闔に立てりしを、マリー、ドラの手に我が兒なきを見て、足らはぬ勝ちなるやもめのたつきを救ひ給ひし神を讃へぬ、ドラ口を開きて云ひけるは「伯父君孩兒を受け給ひぬ。されどマリー、君妾を住はしめ共に働かしめざる可らず、彼夢にだに妾を見じとのたまへるなり」「そは思ひも及ばざりし。妾が爲めに君に累を負はすべきかは。思ふに彼孩兒をたしなめ其母を苦めんとし給ふべきに、いざもろとも彼處に至らん。妾は孩兒を伴ひ歸り、君再び戻り得んことを請ひ聞えんに、是にして許されずは、やむなし、二人かまど一つにしてウ^キリヤムが忘形見の爲めに彼れ人となりて、我等を助け得んまで、いそしむ可し」かくて二人口つけしつ。打立ちて老農の家に至れるに、戸はさしてあらざりき。彼女等さしのぞき見るに、孩兒老いたる祖父の膝の上腕の間に抱かれつゝ、時計のくさりにつながれ、爐の火にかゞやく金章を、親しげに弄べり。されど孩兒の心よ、二人の近けるを見るや、忽ちさけびて其母に至らんともがきぬ。アラン兒を放ちつ。マリー「あはれ父上——かく呼ぶを許し給はば——妾夢々、妾の爲め、ウ^キリヤムの爲め、此兒の爲めに、物請はんとてまかれるにあらず。ドラの爲めなり。彼女を戻らしめ給へ。彼女やさしくも君を敬へるなり。あはれ君、ウ^キリヤムの逝きにし時、なべての人の如く平和に眠りぬ。妾に答へて彼妾と相あへるを悔いず——妾實に永くしのびぬ——されど彼は父上を苦め奉りしを悲み『神父上を祝し給うて我が苦しかりし日頃を知らしめ給ひそ』と云ひつゝ面を

そむけて亡き數に入りぬ。——妾憐む可きかな——そは兎あれ、君を苦め奉る事多かるべければ其孩兒たまひて、ドラの戻らんを許し、總てを初めの如からしめ給へ」と言ふ。ドラたへかねてマリーの後に身をひそめつ。室の中暫く沈黙に満ちぬ。

忽ちにして老農涙に破れつ、「我過てり、過てりしかな。我已れの子を殺せり——されど痛くめでしなり——實に誤てり。我が子等我を口づけせよ」かくて彼女等老父を抱きてあまた度口づけし、老父は唯々悔恨に胸打ち、ウ・リヤムを想起しては、愛着のきほひ衷に熱し、孩兒をかき抱きつゝ、涙を瀉ぐ事や三頭しやうくなりし。

此事ありてより四人は同じき軒に住む身となりつ。年めぐる事そこばくにして、マリーにふさはしき夫ありき。されどドラは世を永久に眠るまで、遂にとつがずてぞありしか。

(歸朝後、札幌時代)

